

観智院本『三宝絵詞』における重点（、）

村 井 宏 栄

一、はじめに

中世漢字片仮名交じり文においては文を書き記す際、言語分節境界を表示する手段には次のようなものが考えられうる。

文字体系の交替（漢字↓仮名、仮名↓漢字）

文字大小の交替（大↓小、小↓大）

朱点・句点の類

重点（踊り字）

スペースの挿入（分かち書き）

（いわゆる）仮名遣い

改行、連綿、異体仮名の使用等

従来、中世漢字片仮名交じり文献は、文を構成する漢字―仮名比率の面からその性質が多く議論されてきたように思われる。一例として、中世漢字片仮名交じり文献を広く見渡した小林芳規（二〇二一）は、漢字と片仮名の比率によって、おおよそ左のごとく大きく二分している。

第一類：漢字が主となり、仮名はテニヨハ等を主に宣命体に小書して記すもの ↓片仮名交り文

〔代表例〕『今昔物語集』・金沢文庫本『仏教説話集』

第二類：片仮名を主として若干の漢字を交えるもの ↓漢字交り片仮名文

〔代表例〕『極楽願往生歌』・『法華百座聞書抄』

しかしながら、小林（二〇二一）も言うように第一類と第二類は言わば両極であって、実際には中間的な様相の文献も数多く、両者の本質的な差違は未だ明確になったとは言いがたい。また、漢字―仮名比率についても、基準が明確であるとは言いがたい。

さらに、右に示した分節手段の数々は、その相関関係が不明である。一例として、漢字表記が選択されることで重点（いわゆる踊り字、以下「重点」）使用の余地が無くなったり、仮名遣いによって結果的に分節性が示されたりするように、各要素は相互に関係を有するはずである。漢字―仮名比率等、一つの現象のみによって中世漢字片仮名交じり文の特徴を論じることが難しいと思われる。

ところで、中古から中世にかけては、文献成立後に表記体の転換が行われる例が複数見られることは広く知られている。法隆寺本『法華百座聞書抄』・大福光寺本『方丈記』・観智院本『三宝絵詞』はおよそ二―三世紀に成立した漢字片仮名交じり資料であるが、それぞれ平仮名本からの書写を想定する論が提出されている（小林芳規一九六三・青木毅二〇〇七・馬淵和夫一九九七等）。とするならば、なぜ表記体は転換できるのか、平仮名文（いわゆる「仮名文」、以下「平仮名文」）の平仮名を片仮名に置換すればそれは即座にい

わゆる「片仮名文」になれるのかなど、多くの問題が存在する。本稿の目的は、中世漢字片仮名交じり文献の一例として観智院本『三宝絵詞』を取り上げ、分節性の観点から重点・同字反復の状況および漢字文節と仮名文節の比率の点から状況を報告し、その性質を検討することにある。

二、重点使用における文献ごとの異なり

稿者はこれまで一三世紀書写の漢字片仮名交じり文献を対象に、同仮名が連続する際に①重点の使用（例「キ、テ」「コ、ロ」と②同字反復（例「ヒト」「ステテ」）のどちらの方法を用いるのかについて、当該箇所の文法的観点（自立語語頭／自立語語中尾／付属語語頭／付属語語中尾）によって傾向が認められるか否かの調査を行ってきた（村井宏栄二〇一八・二〇一九・二〇二〇、以下右①②を合わせて「同仮名（の）連続」とする）。重点・同字反復が用いられる際、同音韻であることが多く予想されるが、清濁対立など、別音韻が想定されるものも含まれる（例「思ハ、」「遂ケ、ル」）。また、同音韻が連続する際、漢字と仮名の接続部分には重点は用いられず、当然同仮名の連続とはならない（以下傍線等は稿者による）。

1 船ニツミテカヘルホト^ニ俄^ニ病ヲウケツ（観智院本『三宝絵詞』中三六ウ三）

2 心ニナヲ魚ヲマレトイフ（観智院本『三宝絵詞』中四〇ウ二）
右においては、文字体系が交替することで意味の区切れ目（分節性）が標示される。つまり、重点使用の有無と漢字／仮名表記の

選択は無関係とは言えない。さらに、重点はその形状より前接成分との連続性を示しやすく、特に文節頭（自立語語頭）においてどちらの方法を選択する割合が高いのかは、資料によって顕著に相違が認められる。

たとえば、大福光寺本『方丈記』においては文節末と次の文節冒頭において同仮名が連続する際、重点を用いる傾向が強い（村井宏栄二〇二〇）。わずかに文節頭（自立語語頭）において同字反復の例が見られるものの、それらは文頭の例であつたり節冒頭に位置するものがほとんどであつて、節内部の同字反復はほぼ見られない。非文節頭（自立語語中尾・付属語）においては重点に完全に統一されており、全体を通して重点優位の文献であると評価できる。

一方、同期の漢字片仮名交じり文献であつたとしても親鸞資料（真蹟）は傾向を大きく異にする。親鸞資料においては文節頭を同字反復で、非文節頭を重点で記すという明確な傾向を持つが、さらに付属語語頭における同字反復も無視できない用例数が認められる（村井宏栄二〇一八・二〇一九）^{注一}。

3 カノクニ^ニ往生シテノウエノコトニ候^{サフウ}（『西方指南抄』上本二一・三）

4 久遠^{クダシヤウ}実成^{ジツセイ}ノ宗^{ムネ}アラワセルヲモテ殊勝^{ジュシヨウ}甚深^{シンシム}ノコトセリ（『西方指南抄』上本一一六・四）

親鸞資料においては、同字反復によって文節同士の境界を示すのみならず、文節内部においても自立語付属語間の境界を示す例がまま見られ、より細やかな単位でも精密な境界標示が行われている。自立語語頭を徹底して同字反復で記し、さらに付属語冒頭もままた同

字反復を用いる親鸞資料に対し、大福光寺本『方丈記』は全般に亘って重点使用を基本としており、重点・同字反復の観点から見た場合、親鸞資料は分析的・規範的傾向にあるのに対し、大福光寺本は非分析的・音声連続的傾向にあると言えるよう。

三、『三宝絵詞』（『三宝絵』）観智院本と関戸家本

かかる状況を承け、本稿で検討を行うのは観智院本『三宝絵詞』である。『三宝絵詞』は源為憲の撰になり、永観二（九八四）年に冷泉天皇の第二皇女、尊子内親王に捧げられた仏教入門のための説話集である。主要写本として、平仮名文で記され保安元（一二二〇）年の識語を有する関戸家旧蔵本、漢字片仮名交じり文で記された観智院本、変体漢文で記された前田家本の三本が知られている。観智院本は文永一〇（一二七三）年の奥書を持つ。

観智院本の上巻はおおむね漢字と小字仮名の単位を基調として文節を記していく、いわゆる片仮名宣命書きである。一方、中・下巻は大字仮名が多く見られ、漢字や小字仮名とも交用する様相である。上巻と中・下巻とで大きく表記の体裁が異なるため、次節以降分けて述べていく。

四、観智院本『三宝絵詞』上巻における重点・同字反復

ここでは観智院本上巻における重点及び同字反復についての状況を示す。同仮名連続する箇所の文法的位置及び品詞によって分類す

ると、次のとおりとなる^{注二}。

（表1）観智院本『三宝絵詞』上巻における重点・同字反復

合計	非文 節頭			文節 頭	重点	同字反復	合計
	付 屬 語	語 頭	自立語語中尾	自立語語頭			
64例	14 (助詞11、助動詞3)	31 (助詞26、助動詞5)	19 (動詞10、副詞1、名詞4、代名詞1、連体詞3)	0			
4例	0	0	0	4 (形容動詞2、動詞1、副詞1)			
68例	45例		19例	4例			

前節でも示したとおり、観智院本の上巻ではいわゆる片仮名宣命書き表記が基調となっているため、そもそも用例数が少ない。中・下巻に比べて自立語の多くは漢字表記がなされるので、同仮名が連続する素地に乏しいためである。

以下詳細を述べる。上巻においては文節頭に重点が全く見られず、同字反復と見なせる用例もわずかに存するが、これらも例外的理由を見出すことが可能である。

5 貴^キ御心ハヘヲモハケマシシツカナル御心ヲモナクサムヘキト
（上序四ウ七）

6 何^ニ依^{カリテ}加^カ久^ク許^コノ事^ニ痛^ミ迷^ミテ
（上九オ九）

7 此^ノ虎^ハ何^ニ者^ニ者^ト問^ハヘハ
（上三〇ウ七）

まず、観智院本上巻は序文四オ〜五ウまで、例外的に中・下巻に

匹敵するような漢字片仮名交じり表記がなされており、5はその範囲内の用例である。6「加久許」（かくばかり）7「者む」（はむ）もそれぞれ例外的に真仮名・行草体平仮名表記がなされており、用例数として計上はしたものの、例外的に出現する特異な文字種であるところから、厳密には同字反復と言えない。例外的理由を見出しがたいものは次の例のみである。

8 彼山ハルカニ遠リカ（上三五才九）

8では「彼山」に助詞「は」が下接しており、「ハ」が小字仮名として記されている。大字仮名・小字仮名の対立が見られるため、表記種として完全に同一とは言えない。以上のように、自立語語頭においては積極的に存在を認められる用例がほぼ存在していない。

一方、非文節頭においてはある程度の用例数が見受けられるが、このうち自立語語中尾においては部分的にまみえられる例外的な真仮名表記・行草体平仮名表記、序文内の例外的表記傾向に由来する傾向が強い。付属語については、宣命書き部分において特定の語への偏りが認められる^{注三〇}。

◎自立語語中尾―重点 19例

動詞10例（イタ、ケル、カ、セ、ト、マラシ、不経タ、ス、聞キ、シカハ、聞キ、テ、多礼、加末利天、相ヒ別ル、離ル、）

名詞4例（おと、1、宇津と1、鹿シ、2）

連体詞3例（加と留3）

副詞1例（弥ヨ、）

代名詞1例（コ、）

◎付属語語頭―重点 31例

助詞26例「て」13（出テ、棄テ、捨テ、等）、「ば」9（念ハ、養ハ、行キ給ハ、等）、「と」2（実ト、実ト、ハ）、
「に」1（何ニ）、「の」1（獣モノ）

助動詞5例「き」3（構へ殺シ、流シ、ナリ、成シ、カハ）、
「なり」1（物ナ、レ）、「り」1（当レ、ハ）

◎付属語語中尾―重点 14例

助詞11例「つつ」11（云ツ、見ツ、来ツ、等）

助動詞3例「る」（被免ル、切ラル、二等）

自立語語中尾のうち、動詞「イタ、ケル、カ、セ、ト、マラシ」、名詞「おと、」代名詞「コ、」、は序文四ウ五ウの範囲内に位置しており、例外的である。また、動詞「不経タ、ス、聞キ、シカハ、聞キ、テ」、名詞「鹿シ、」は全訓仮名であり、用例数も多いとは言えない。他、漢字用法が字義を鑑みていないという意味で用例数に計上したが、動詞「多礼、加末利天」、名詞「宇津と」、連体詞「加と留」においては例外的な真仮名表記であり、重点自体の形状（と）も片仮名に下接するもの（と）とは異なっている。付属語においては助詞「て」「ば」「つつ」に集中しており、特定の語への偏りと言えよう。

小括として、観智院本の上巻においては片仮名宣命書きという表記形式によってそもそも用例数が出にくく、宣命書き部分に見られる付属語の特定の単語に由来するもの他は、部分的な例外的表記によって自立語にも重点の用例が散発する状況と言える。

五、観智院本『三宝絵詞』中・下巻における重点・同字反復

五・一重点・同字反復の概況

片仮名宣命書きで記された上巻に対して、漢字・大字仮名・小字仮名が交用している中・下巻の状況をまとめると次のようになる。

(表2) 観智院本『三宝絵詞』中・下巻における重点・同字反復

合計	非文節頭			文節頭	
	付属語その他		自立語語中尾	自立語語頭	
	語中尾	語頭			
349例	20 (助詞16、助動詞4)	69 (助詞55、助動詞14)	219 (動詞155、副詞24、名詞24、代名詞7、形容詞5、連体詞2、形容動詞1、接統詞1)	41 (動詞32、名詞7、形容詞1、副詞1)	重点
37例	0	2 (助詞1、助動詞1)	1 (動詞)	34 (動詞17、名詞9、副詞4、形容詞3、形容動詞1)	同字反復
386例	91例		220例	75例	合計

まず自立語語中尾・付属語について、重点に偏在するのはさきに見た他資料や観智院本上巻と同様の傾向であり、大きな特徴とは言えない。自立語語中尾に一例、付属語語頭に計二例の同字反復が見られるが、次のような例である。

9 諸ノ善事等^ラアラハシメス (下六九ウ七)

10 京ニモセノ道ノクニ^ニモ (下五六ウ四)
11 仏龍寺ノ行満座主ノイハク昔キ、キ智者大師乃給ハク (下一一オ五)

9は複合動詞の後部構成要素冒頭の例であり、「アラハシメス」の「シメス」は別形態素であることから、他の自立語語中尾の例と同列のものではない。10・11においても、それぞれ助詞「に」・助動詞「き」が同字反復によって記されるが、この二例はいずれも重点(くの字点・一つ点)直後に位置しているところから、特殊な環境下の例外的同字反復の例である。

観智院本の重点用法について、最も特徴的なのは自立語語頭においてである。自立語語頭の状況については、重点四一例に対して同字反復三四例であり、第二節に見た大福光寺本『方丈記』や親鸞書写資料とは異なり、方針が定まっているとは言えそうにない。具体例を示すと以下のとおりである(※は文頭を示し、△は当該部分前後に重点の存することを示す)。

◎自立語語頭―重点 41例

動詞32例 「^レと+動詞」12(「^レト、ヘハ等」、「^レを+動詞」10(願ヲ、コシテ等)、「^レの+動詞」6(仏ノ、給ハク等)、「^レに+動詞」1(僧ニ、タマヘリ)、ナカク、ヘト1、ミナ、ク1、モノ、給1

名詞7例 「^レの+のち」4(コノ、チ等)、「^レと+ともに」3(我ト、モニ等)

形容詞1例 アナ、シ1

副詞1例 イマ、サニ1

◎自立語語頭―同字反復 34例

動詞17例 「ゝを＋動詞」8（心ヲヲコサシム等）、「ゝに＋動詞」5（ヨノ人ニニス等）、「ゝの＋動詞」1（仏ノ乃玉ハク）、伝ヘツ、ツクリ給ヘリ1△、サタメカタシシカシ1※、シリカタシシカシ1※

名詞9例 「ゝを＋名詞」2（ヒマヲヲヨヒサス許・其日ヲヲハリニ）、汝カカタチハ1、汝カカハリニ1、御ヲコナヒヒマナク1、ナカククルシヒヲ1、文殊会ハハシメハ1、民モモロくノ1△、カクスヘカラススヘテハ1※

副詞4例 「ゝて＋副詞」2（マウケテツツカラ等）、ゝトナツケツツヒニ1※、オロカニスヘカラススヘテ1※

形容詞3例 「ゝを＋形容詞」1（法ヲヲモクセム）、同ケレトトク1、タテタマフフルキ1※

形容動詞1例タ、タヒラカニ1△

重点使用の例に「ゝノ、チ」の例が四例含まれるが、重点使用はこのタイプのみではなく^{注四}、助詞に下接する「ゝと＋動詞」や「ゝを＋動詞」、「ゝの＋動詞」など動詞の例が数多く観察される。

一方、同字反復においては文頭の例が計六例見られるが、それ以外にも重点使用と同様に、助詞直後など節内の例と見られるものも多く観察されている^{注五}。たとえば助詞「を」に下接する同仮名の連続は重点一〇例に対して同字反復一一例であり、拮抗している。

12マサ^ニ今サトリスクナクシテ心ヲ、コスニアタハス（下五一オ

一）

13菩提ノ心ヲコサシムトイヘリ（下三三ウ六）

14勅使ヲ給テ事ヲ、コナハシメ（下六六オ三）

15孝ヲヲコナハムモノハ念々ニツネニ思ヒ（下六〇オ三）

右は「ゝを＋おこす」「ゝを＋おこなふ」の例であるが、重点使用・同字反復ともに用例が見出される。自立語語頭における観智院本『三宝絵詞』（中・下巻）のありようは大福光寺本『方丈記』や親鸞資料とは異なり、どちらで記すかという方針においては「定まっていない」状況のように思われる。

なお、第三節に示したとおり、『三宝絵詞』（『三宝絵』）には平仮名本である関戸家本が知られる。参考のために関戸家本の重点・同字反復の状況を示すと次のとおりである。

（表3）関戸家本『三宝絵』における重点・同字反復

合計	文節		非文節		合計
	自立語語頭	重点	自立語語中尾	同字反復	
	55（動詞27、名詞18、副詞4、形容動詞3、接続詞2、形容詞1）	5（名詞3、動詞1、形容動詞1）	143（動詞69、名詞53、代名詞4、副詞10、接続詞5、形容詞1、形容動詞1）	0	60例
	4（助詞3、助動詞1）	36（助詞33、助動詞3）	2（助詞2）	0	42例
238例	7例	245例			143例

関戸家本においては、文節頭（自立語語頭）でも非文節頭（自立語語中尾・付属語類）でも、場所を選ばずに重点が圧倒的である。

同字反復が計七例認められるが、うち当該箇所直前直後に重点が存するものが四例あり、特殊な環境下における例外例である。

16 た、たひらかにおはすとき、（関戸家本『三宝絵』七二ウ二）

17 な、つの道のくにくほうしあまにふせをたまひて（関戸家

本『三宝絵』八一ウ六）

たとえば16において重点が用いられると「た、ひらかに…」となり、〈只平らかに…〉という文意を伝えにくい。次の17においても、上接する名詞が「くにく」であることから、重点ではなく仮名で記されているのであろうと想像される。こうした環境下に残り三例について、うち二例においては上接仮名と字母が異なっていることには注意しておきたい。次の例は「若し、食ありやと…」であるが、異なる字母が用いられている（当該部分のみ字母で示す）。

18 毛之志支ありやとふ（関戸家本『三宝絵』五四オ三）

結果、関戸家本の同字反復はごくまれであると言えよう。

また、自立語語頭を重点で記すもののうち、節外のものがまま見られ（19）、さらに文頭に位置する六例も見られる（20）。

19 こしのつるかのつにゆきてものをかひてふねにつみてかへるほ

とに、わかになやまひをうけて…（関戸家本『三宝絵』五二ウ五）

20 もとのさにかへらんことをねかふ、な人これをおくる（関戸

家本『三宝絵』六〇オ二）

右の20は「元の郷に帰らんことを願ふ。舟人、これを…」であり、文頭であつても仮名ではなく重点で記すという姿勢が鮮明である。書写年代の開きもあるが、漢字含有率も大きく異なる関戸家本（平仮名本）では、重点・同字反復の様相も大きく異なっており、稿者

のこれまでの調査資料の中では大福光寺本『方丈記』の傾向と近似していそうである。

五・二仮名大小の対立

『三宝絵詞』（『三宝絵』）は、「本来は平仮名文であつたと推測される」（森正人一九八四）等とされてきた。第二節に示したとおり、大福光寺本『方丈記』も元は平仮名本であつた可能性が指摘されており、両文献はこの点で共通性が認められるが、重点・同字反復の様相はかなり異なっていると言えよう。ただ、この異なりは、観智院本に仮名大小の対立が頻繁に広く認められることにも由来すると考えられる^{注六}。文頭や当該部分前後に重点の存する例を除いた自立語語頭において、同字反復が見られる二五例のうち、同字反復箇所の直前が小字仮名である例は一五例を占め、これは僅少な数値とは言えない。

21 会ヲ^ヲカミタテマツル人ハ（下四一オ三）

22 ナカイキシテ人ニクマレムヨリハシカシ（中二六オ八）

23 ヨノ人ニ^ニスト申（下二八ウ一）

24 其日ヲ^ヲハリニアテ、（中四六オ四）

右の21「会ヲ^ヲカミタテマツル」、22「人ニ^ニクマレムヨリハ」であれば、小字仮名「ヲ」「ニ」はそれぞれ「会」「人」に付属する成分である。したがって、表2においては同字反復に計上したものの、実態は「漢字^{小字仮名}＋大字仮名」であつて、大字仮名―小字仮名という対立がある以上、そもそも重点使用がなされにくいという側面があるろう。

平仮名文は一部に漢字表記が見られるものの、主として平仮名の草体によって文を表記していく。これに対して漢字片仮名交じり文は一文の中に漢字・大字仮名・小字仮名という異なる文字種が併存する可能性があり、結果、より分節的に表記しやすいのも事実である。漢字片仮名交じり文献は、片仮名を用いるが故に即座に表音性が高い、とは言えない。

重点と同字反復とは、仮名大小の対立と無関係ではなく、中世漢字片仮名交じり文においては、各要素間の関係からも性質を考えていく必要がある。

六、漢字文節と仮名文節の比率

中古・中世における漢字と片仮名を用いた表記体の名称については、従来様々な名称で称されてきた。漢字と片仮名とが相互の比重を保ち、大きな軽重がないと思われるものを「漢字片仮名交じり文」、一方、仮名が基調であってそれに漢字が補助的に交じっているものを「漢字交じり片仮名文」（乃至「片仮名文」）などとする考え方もあろうが、「相互の比重」や「基調」がどの程度を言うのかについては主観的判断の入り込む余地があり、客観的な指標が求められる。このような中で、中田祝夫（一九八二）は野村雅昭（一九七二）の調査方法に倣い、文節を単位として仮名交じり文の構成比を比較した上でその性質について考察している。名称と定義については、「漢字・仮名交り文」を「漢字と仮名とが相互の比重を保ち、軽重の意がないという観点からの名称で、漢字が頭部にくる文節が五〇

―七〇パーセント程度、仮名文節は五〇―三〇パーセント程度のもの」としており、この基準に対して、より漢字が基調となっているものを「仮名交り文」、逆に仮名が基調となっているものを「漢字交り文」としている。

本稿においてもこの観点を援用し、文節冒頭が漢字と仮名のどちらで始まるのかという文節比率の観点から検討を行う^{注七}。その際、比較のために大福光寺本『方丈記』の状況も併せて報告する。

六・一 観智院本『三宝絵詞』

観智院本『三宝絵詞』中・下巻^{注八}の文節構成比についてはかつて村井宏栄（二〇一〇）で報告している。

（表4）観智院本『三宝絵詞』の文節構成（村井宏栄二〇一〇より形式改）

表記種の構成	文節用例数			
	① 漢字のみ	② 漢字＋仮名	③ その他	④ 仮名のみ
【漢字文節】	二七七九 (17.0%)	六四四四 (39.4%)	六四 (0.4%)	六六九三 (40.9%)
【仮名文節】				一〇四 (0.6%)
⑥ その他	二七二 (1.7%)			七〇六九 (43.2%)
合計	一六三五六 (100.0%)			

例①家・今、②厩ノ・口ニ、③供養シ給・食ヒ物、④アツマリテ・

モトニ、⑤ツクラシメ給・シラスル也、⑥トラヘシメ給ヘ・ケタ物タニモ

ただし、村井(二〇一〇)は主として仮名大小の対立に着目した論考であったため、表記種の類型は表4に見る六種類ではなく、全二種類を認めている。なお、この調査では複合語については基本的に分割して計上したが(ただし、後項要素の意味が希薄化しているものは分割していない)、全体に占める割合がわずかであるため、大勢には影響を及ぼさないと思われる。

観智院本においては漢字文節五六・八%に対して仮名文節四三・二%となり、中田(一九八二)の分類に従うならば「漢字・仮名交り文」と判定される。

六・二大福光寺本『方丈記』

ここでは比較のために大福光寺本『方丈記』について文節構成の調査結果を示す。用例の採取については以下の方針に従った。

◎用例採取の方針

(ア) 新典社版の影印によって文節を採取し、その文節がどのような表記種類型によって記されているのかによって分類する。漢字の読みの認定については基本的に新日本古典文学大系本(岩波書店)によったが、『広本略本方丈記総索引』(武蔵野書院)と勘案して総合的に判断した場合がある。

(イ) 複合動詞や複合形容詞は、基本的に分割せず一文節とするが、複合語かどうか判断しにくい場合は二文節としてとらえた。

(ウ) いわゆる付属語のうち、「ゴトシ(如)」のみは一文節とし

て扱う。

(エ) 固有名詞のうち、地名は「〰国」「〰郡」などの単位ごとに分割し、人名は一人物と認定できる場合には分割しない。「人名+官位・職名」の場合も分割しない。

右の結果、漢字文節八五八文節、仮名文節一六二七文節が得られた。複合語をどう見なすのか、固有名詞をどうとらえるのか等によって多少の数値の出入りはあるが、大きな差は生じないと思われる。

(表5) 大福光寺本『方丈記』の文節構成

表記種の構成			文節用例数	
【漢字文節】	① 漢字のみ	二四二 (9.7%)	八五八 (34.5%)	
	② 漢字＋仮名	六〇八 (24.5%)		
	③ その他	八 (0.3%)		
	④ 仮名のみ	一六〇一 (64.5%)		
【仮名文節】	⑤ 仮名＋漢字	一〇 (0.4%)	一六二七 (65.5%)	
	⑥ その他	一六 (0.6%)		
	合計	二四八五 (100.0%)		

例①大家・不知、②河ノ・同シ、③覺エ侍シカ・帰リ給ニキ、④タエスシテ・ヨトミニ、⑤コレ也・シホ風、⑥ツシ風ハ・アカ月ノ

表4・5によると、大福光寺本の構成比は漢字文節三四・五%対仮

名文節六五・五%ということになり、観智院本『三宝絵詞』の方が大福光寺本『方丈記』よりも格段に漢字文節の比率が高いということがわかる。両者は中田（一九八二）の分類に従うならば観智院本『三宝絵詞』が「漢字・仮名交り文」、大福光寺本『方丈記』が「漢字交り文」となる。観智院本『三宝絵詞』と大福光寺本『方丈記』とはともに平仮名文献からの書写が想定されているが、現存諸本において漢字文節―仮名文節比率については、やはり相当の相違があると言えよう。

文節比率と重点との関わりについては、漢字文節比率の高い観智院本の方が、同仮名連続の際に自立語語頭（文節頭）の同字反復の比率が高いという結果が生じた^{注九}。漢字文節の割合が増えるということは、同音連続が仮名で記される実数が少なくなるので、観智院本上巻のような片仮名宣命書き形式の場合、自立語語頭の用例数自体が少なくなるのは当然である。

「漢字＋仮名」の単位は多く文節に相当し、視覚的にも言語単位として意識化されやすい。観智院本中・下巻のように大字仮名が相応に入り込んだとき、大字仮名で記された自立語語頭にもこの意識が投影され、仮名大小の対立はこれを補強していることとらえることができる。観智院本中・下巻においては「大字仮名^{注一〇}」の型が多数認められ、仮名大小の対立において、小字仮名部分に対する単語意識の証左となっている^{注一〇}。漢字・大字仮名・小字仮名が交用する漢字片仮名交り文献はこの単位の連続によって文を構成していくため言語境界が意識化されやすく、同字反復が出現しやすい素地となっていると考えられる。この特徴は平仮名本にはありえ

ず、片仮名本独自のものである。

七、表記体の異なり

観智院本『三宝絵詞』と大福光寺本『方丈記』とは、ともに平仮名文で記された古写本を有する。関戸家本『三宝絵』と前田家本『方丈記』である。大福光寺本は山田孝雄（一九二五）によって「鎌倉時代中期を下らざるものなるべくして」とされて以来、『方丈記』研究の中心的諸本であった。前田家本は土田知雄（一九六二）は「その書風から推して、鎌倉末期ごろの書写と考えられる」としており、大福光寺本と近い年代に成立している可能性が高い。

関戸家本『三宝絵』の重点・同字反復の状況は五・一節に示したとおりであり、全体的に重点優位な状況である。他方、前田家本『方丈記』の重点・同字反復の状況については村井宏栄（二〇二〇）ですでに報告している。これによると、自立語語頭は重点一一例に対して同字反復一八例が認められ、方針は未徹底であるものの、実は同字反復の方が優位である。

関戸家本『三宝絵』の重点のありようを『方丈記』大福光寺本・前田家本との対比で考えたとき、平仮名―片仮名という仮名体系の異なりがあるにもかかわらず、関戸家本の重点のありようは実は前田家本（平仮名本）ではなく大福光寺本（片仮名本）の方に近いと言え、片仮名文献と同様、同じ平仮名文献でも重点は文献ごとに様相が異なるということを指摘できる。

今野真二（二〇〇一）は『土左日記』根幹写本四種を調査し、書

写年代が下がるに従って重点の使用そのものが減り、中でも語頭位置での重点使用が明らかに減少していることを報告している。平仮名文献における重点使用が歴史的に見て減少していくという方向性と理解でき、関戸家本と前田家本の重点・同字反復の様相の異なりは、書写年代の開きにも由来する可能性があるが、それぞれの文献ごとの漢字文節比率、親本段階での書写の様態^{注二}、いわゆる仮名遣いの問題など、片仮名文献・平仮名文献双方について併せて考えていく必要がある。

注

一 村井宏栄（二〇一八・二〇一九）で調査を行ったのは以下の資料である。専修寺蔵『唯信鈔』（信証本、寛喜二（一一三〇）年）・法雲寺蔵『尊号真像銘文』（建長本、建長七（一二五五）年）・専修寺蔵『西方指南抄』（康元元（一二五六）年）・専修寺蔵『唯信鈔文意』（正月二十七日日本、康元二（一二五七）年）・東本願寺蔵『二念多念文意』（康元二（一二五七）年）・専修寺蔵『尊号真像銘文』（正嘉本、正嘉二（一二五八）年）。

二 用例採取においては、その対象は本文の仮名表記部分に限定し、漢字表記と仮名表記の接続部分や漢字表記右傍に記される振り仮名部分・行頭例は対象外とした。また、二字以上の重点（「く」「ん」「等」についても取り上げない。この基準は以下他資料の調査でも同様適用する。

三 以下用例の種別を示すための例については宣命書き部分を小字で示すことはせず、双行も単行で示す。

四 親鸞資料においては例外的に自立語語頭に重点が用いられる際、「くノ、チ」の例に偏っている。村井宏栄（二〇一八・二〇一九）参照。

五 動詞の「くノ+動詞」タイプにおいては「仏ノ乃玉ハク」が見られ、異体仮名によって語頭が標示されている可能性が認められる。ただし観智院本内において「のたまふ」の仮名書き例（「ノ給」等を含む）を見ると、「ノ…」三二例に対して「乃…」二三例であり、必ずしも「乃」には統一されていない。

六 観智院本『三宝絵詞』の小字仮名については村井宏栄（二〇〇六）で詳細を述べた。なお、大福光寺本『方丈記』には仮名大小の対立はほとんど見受けられない。

七 文字数の観点から漢字表記と仮名表記の割合を比較する方法もあり得るが、語の音節数が長くなる語ほど結果に及ぼす影響が大きくなるため、本稿では採用しない。

八 以下特に断らない限りは観智院本は中・下巻のみを指す。

九 ただし、漢字文節が高ければすなわち自立語語頭の同字反復が多くなるかという点必ずしもそうではない。佐々木勇（二〇一五）は親鸞資料全体について精緻な表記体分類を行っており、これによると『唯信鈔文意』『二念多念文意』は「漢字交じり片仮名文」に分類されるという。当該二資料の自立語語頭においてはそれぞれ同字反復が重点を圧倒しており、かつ付属語語頭においても同字反復で記す用例数が重点使用を上回っている（村井宏栄二〇一九）。この二資料は跋文にも記されるように、漢字の知識の浅い人々にも理解できるよう、わかりやすさが工夫されており、同字反復の出現の高さも、執筆への姿勢と関わりが考えられる。さらに親鸞の書記法は、「オ」と「ヲ」の対立において、助詞「を」は「ヲ」で表記するのに対し、「をば」「をや」を含む他の語の語頭は「オ」で表記するという独特の仮名遣いや、漢語は漢字表記、和語は仮名表記という使い分けなどが見られ、独自の規範性・統一性が夙くから指摘されている（吉沢義則一九二七、金子彰一九七八・一九八〇・一九八五など）。親鸞資料は当該期の片仮名文献において特異な存在として位置付けることができよう。

一〇 「大字仮名+小字仮名」で文節を書き記す場合、大字仮名の連続で記した場合と比較すると、言語単位の「かたまり」として視覚的に把握可能である。なお、村井宏栄（二〇一〇）では観智院本『三宝絵詞』中・下巻の「大字仮名+小字仮名」文節を計三一九例認めており、これは全体の中で二・〇％となっている。

一一 「方丈記」の諸本系統については、近年、三角洋一（二〇一二）によって、漢字表記を経由して現前田家本の表記が生じたと解釈できる例が複数見られることから、「前（稿者注、前田家本）の親本としては大（稿者注、大福光寺本）に比べてやや漢字表記の多い本が想定されることが明らかに」

と指摘されている。このことと前田家本の文節頭に同字反復が優位であることが関係性を有するかどうかは不明であり、今後検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 青木毅 (二〇〇七) 『大福光寺本『方丈記』の本文をめぐって——平仮名本文先行の可能性——』『徳島文理大学文学論叢』二四
- 金子彰 (一九七八) 『親鸞の仮名づかい』『国文学攷』七六
- 金子彰 (一九八〇) 『親鸞聖人遺文の表記研究(1)——自筆書簡に於ける語の漢字表記を主として——』『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』二五
- 金子彰 (一九八五) 『親鸞聖人遺文の表記研究(2)——親鸞自筆書簡と親鸞寫法然書簡・法然自筆書簡との比較を通して見た語の漢字表記についてその(1)(漢語の仮名表記)——』『新潟大学教育学部附属長岡校園教育論究』二五
- 小林芳規 (一九六三) 『法華修法百座聞書抄の表記についての検証』『王朝文学』八
- 小林芳規 (二〇二二) 『小林芳規著作集第一巻 鎌倉時代語研究(上)』汲古書院、初出は同(一九七二)『中世片仮名文の国語史的研究』『広島大学文学部紀要』三〇(特輯号三)
- 今野真二 (二〇〇一) 『仮名表記論攷』第二章第一節三、清文堂出版、初出は同(一九九六)『分節機能からみた重点——『土左日記』根幹諸本を中心資料として——』『人文科学研究』四
- 佐々木勇 (二〇一五) 『記念講演親鸞聖人の漢字音に見られる諸相』『真宗学』一三二
- 土田知雄 (一九六二) 『新註方丈記全釈』武蔵野書院
- 中田祝夫 (一九八二) 『日本語の世界4『日本の漢字』』中央公論社
- 野村雅昭 (一九七二) 『漢字かなまじり文の文字連続』国立国語研究所報告四六
- 『電子計算機による国語研究Ⅳ』秀英出版
- 馬淵和夫 (一九九七) 『三宝絵解説』新日本古典文学大系『三宝絵 注好選』岩波書店
- 三角洋一 (二〇一七) 『方丈記』の古本系諸本の関係』『国語と国文学』八九—五
- 宮田裕行 (一九七二) 『三宝絵詞』の表記——仮名遣を中心に——』『東洋大学短期

大学紀要」二

- 村井宏栄 (二〇〇六) 『観智院本『三宝絵詞』における小字仮名・漢字片仮名交じり文における三種類の表記種——』『三重大学日本語文学』一七
- 村井宏栄 (二〇一〇) 『観智院本『三宝絵詞』における文節と表記種類型』田島毓堂編『日本語学最前線』和泉書院
- 村井宏栄 (二〇一八) 『西方指南抄』における重点について』『相山女学園大学研究論集人文科学篇』四九
- 村井宏栄 (二〇一九) 『漢字片仮名交じり文で記された親鸞遺文における重点(一)』『言語と表現研究論集』一六
- 村井宏栄 (二〇二〇) 『中世漢字片仮名交じり文における重点(一)——大福光寺本『方丈記』を軸として——』『国語語彙史の研究三十九』和泉書院
- 森正人 (一九八四) 『三宝絵』の項、『日本古典文学大辞典』岩波書店
- 山田孝雄 (一九二五) 『大福光寺本方丈記解説』『方丈記』古典保存会
- 吉沢義則 (一九二七) 『国語国文の研究』岩波書店、初出は同(一九二二)『親鸞聖人の写語法』『龍谷大学論叢』二四六

使用テキスト・索引

- ◆観智院本『三宝絵詞』：勉誠社文庫『三宝絵詞』上下(勉誠社、一九八五)
- ◆関戸家本『三宝絵』：名古屋博物館編『名古屋博物館蔵三宝絵』(名古屋博物館、一九八九)
- ◆中央大学国語研究会編『三宝絵詞自立語索引』(笠間書院、一九八五)
- ◆大福光寺本『方丈記』：『大福光寺本方丈記』(新典社、一九七六)
- ◆前田家本『方丈記』：『尊経閣叢刊』『方丈記』(育徳財団、一九三八)
- ◆青木伶子編『広本略本方丈記総索引』(武蔵野書院、一九六五)

付記 本稿は、第四五回表記研究会発表会(於清泉女子大学、二〇二〇年一月二五日)での口頭発表「中世漢字片仮名交じり文における書記分節方法——大福光寺本『方丈記』と観智院本『三宝絵詞』の比較から——」の一部に基づき、大幅に加筆修正を加えたものである。席上及び発表後、多くの有益なご教示を賜った。ここに記して深謝し上げる。なお、本研究はJSSC科研費18K0626・21K06559による成果の一部である。